

ぼくらの長崎観光 2020年・秋

作／福田隆浩



絵／山本久美子

〔1〕

「ようするにオランダ坂ってさ、どこにでもあるふつうの坂道じゃないの？ あーあ、残念すぎ。すっごく、がっかりしちゃったー。」

肩をすくめ、凜子は小馬鹿にしたようにいった。しかも、マスクなしだったら、まちがいなくまわりの人にも聞こえるくらい大きな声で……。

当然ながらぼくはカチンときた。そりゃあそうだ。ここはぼくが生まれ育った町だ。よそのものこのいつに、あれこれいわれたくなんかない。

いいかげんにしろよな！ この町の歴史とか情緒とか、そんなものを感じ取ってこそそのオランダ坂なんだぞ！
本当なら、そう怒りの声をあげるところだ。けれど、そ

の日のぼくはいいいたいことをぐっと我慢した。だって仕方ない。麻子おばさんに、凜子のことをくれぐれもと頼まれてしまったのだから。

麻子おばさんというのは神奈川県に住んでいる母さんの妹で、昨日から、娘連れで長崎にやってきていた。その娘とというのが凜子で、つまりぼくと凜子はいとこ同士ということになる。

ただし、こいつは小五でこっちは小六。だから、対等な関係では絶対がない。昔は、「コウ兄ちゃん！」といいながら、ぼくのあとをいつもついて回っていたのだから……。それなのに凜子は、迎えに行った空港で久しぶりに顔を合わせたというのに、最初からずっと不機嫌そうだった。

「昌樹おじさんは？」